

事御奉行に被遣候御紙面、寫別紙兩通之通に御座候。右私先祖大工肝煎役被仰付候由來、有増如斯御座候。以上。

貞享二年正月

金澤組大工肝煎六助 判

御作事御奉行所

別紙兩通寫

加州大工肝煎六助事、御扶持人並に被召置候ても、年中作料同前之由与申上候通得御意候處に、當年より御扶持人に可被成旨被仰出候條、彌、御作事方之事可入情旨可被申渡候。恐々謹言。

四月十八日

横 山城守 名乘 判

本 安房守 名乘 判

佐久間彌右衛門殿

淺井 八左衛門殿

稻垣 三丞殿 人々中

御大工黒川六助手前之儀就御尋、最前本多安房守殿、横山山城守殿書狀懸御目候處、如前々可爲御扶持人之旨被仰出候條、其御心得允候。恐々謹言。

十二月十六日

生駒内膳 名乘 判

今枝民部 名乘 判

佐久間彌右衛門殿

稻垣 三丞殿

右貞享二年の由來書にて、國初以來金澤大工の事知られたり。舊藩國初以來能登大工・越中大工、或は能登組大工・越中組大工とも呼べり。故に金澤大工をば加賀大工或は金澤組大工と稱したるもの也といへり。

○山上善右衛門喜廣傳

喜廣は、金澤大工の鼻祖なり。國事昌披問答に、大工に二流あり。建仁寺流・永平寺流と云ふ。建仁寺流は横山權頭吉春より山上氏へ傳來せり。永平寺流は平内吉政より安田氏へ傳來すといへり。三壺記に、明曆三年に利常卿加賀國小松梯天満宮を建立し給ふ時、御大工山上善右衛門に指圖被仰付、善美を盡し造營方落成す。棟札をば傳燈寺千岳和尚に被命。とありて、右棟札に大工入唐自横山喜春十七代山上善右衛門尉喜廣と書載せたり。小松城考に云ふ。明曆元年天満宮を梯河濱に新に建立なり。本社は良匠山上善右衛門

に命じ、京北野天神社の狀を四分之一に縮造すと云ふ。爰器も亦北野の諸器を模作し寄納あり。其の詳かなる事は天神社記にあり。とへり。湯淺祇庸の藩國官職通考に、山上善右衛門は寛永五年に召出され、粟米五十俵賜はり、其後微妙公壹曲尺の儀を尋ね給へり。七堂伽藍の地取等を指上げて、委細申上げるに甚だ御感あり。依りて正保三年に知行百石になし下さる。其子伊左衛門と云ふ。伊左衛門の時に至りては切米にて賜はりたりとぞ。とあり。按ずるに、寛永四年の土帳に、未相極不申衆とある人々の内に、三拾石能州大工衆森五郎右衛門。とあり。一本には木村五郎右衛門とあり。此の外に穴生は三百石清兵衛・百石久左衛門・七拾石左兵衛・五拾石源兵衛・五拾石清右衛門・四拾石三右衛門、人數六人、知行高六百拾石。とあり。但し金澤大工として給知之者は無かりしゆゑに、寛永五年に山上善右衛門をば召抱えられしと聞ゆ。舊藩中は御大工として扶持切米を賜はれるもの數人ありて、平大工の惣裁をなしたり。

○渡邊伊兵衛傳話

伊兵衛は、舊藩の扶持人大工にて、利常卿小松在城の頃奉

仕せり。萬治元年江戸城の天守葺建築方を幕府より命ぜられ、此の時作事方大工の惣裁をば渡邊伊兵衛勤めたり。毛利詮益の拾葉名言記に云ふ。明曆四年の春天守葺御普請を加賀守様へ御頼被遊に極りて、中納言様三月九日に小松御發駕被成、同廿二日江戸御參府被遊也。御國より人夫二千五百人外に杖突・帳付・食持以上三千人の積り也。今の御上屋敷に明地もなく小屋懸る。賄、升屋市郎兵衛被仰付也。右の外に仁作手籠と申て大坂より召寄られ、二百人有。石丸吉之丞に裁許被仰付。きやりの者七人御雇切に被成。江戸手籠・江戸日用は何も石屋少次郎奉り、時々に入用次第に入申也。自公儀御手合に付申御大工鈴木修理、穴生には駿河と申者也。御普請惣奉行には久世大和守、下奉行に付きたる衆は、本よりの御普請奉行津田平左衛門並の衆三人也。天守葺餘り高きは風強く當り、以後も無益事也。一聞ひきく御築き被成やうにと被仰出て、繩張の日極り、幕府御大工鈴木修理・穴生駿河に、此の方御大工渡邊伊兵衛を付け被遣也。然る處に古天守葺廻りよりかねを當て見て、繪圖に寫し崩し可申と幕府の御大工共申しけり。如此